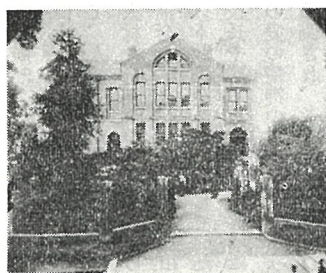


宗藤圭三 名誉教授

に聴く

大正期の同志社大学



聴き手

河野 仁 昭

(社史史料編集所)

同志社人との出会いと入学

——先生は、大正六年九月に、大学の予科へ入学なさいましたんですね。

宗藤 そうです。大正六年には一般に学制改革があったので、同志社では三月と七月の二回入学試験がありましてね、私は九月に入りました。

——同志社を選ばれた動機は？

宗藤 動機といいますが、私は三歳のとき風呂のお湯が耳にはいり、ひどい中耳炎にかかり、全治しないまま岐阜県立の東濃中学校に入学し、その後も治療をつづけていましたが、どうにも校医の手におえなくなり、夏休みの七月ごろ、京大病院で大手術をうけ、右耳の器官を全部取り除いたのです。そのあとが浸潤質となり、少なくとも年に二回は専門医の治療を要する状態でした。当時は、入学試験に体格検査が重視されていましたが、同志社大学は体格検査のなかった唯一の学校であつたことが、一般的にいつてその第一の条件となりました。

——それで、同志社へ？

宗藤 そこでもう少し詳しく述べますと、

ずっと以前から、東濃中学の教員をしていた父のかつての同僚であり、父がたいへん懇意にしていたいた同志社ハリス理化学学校出身の福井大三郎先生が、すでに同志社中学へ移っておられましたので、福井先生を頼って京都へ参りまして、最初に診てもらった府立病院はベッドがふさがつていてためだったものですから、福井先生や父の教え子にあたる京大医師内田貞春先生のお世話で京大病院へ入院し、翌日、日曜日であつたにもかかわらず大原主治医が手術をして下さった。それから翌年五月まで、十カ月入院して右耳の器官を除去しました。その間、福井先生と奥さんが、それはもう親でもしてはくれんだろうと思われるほど、ほんとうに親身になって世話を下さったんですよ。父は勤務の都合で来れないし、母は広島島の郷里（現・西条町）の家の仕事で動けなかった。それで福井先生が親代わりになって下さいましてねえ、秋の第二回目の大手術のとき奥さんはお産をされてまして、「あなたが手術を受けた日のことは忘れられません」と、後から言われた。それまで私は全然気がつかなかったのですが、それほど私に心配をかけさせないように気をつ



宗 藤 圭 三 氏

かつて下さいましてね。クリスマスチャンというのは、なるほどこうも偉大な人たちなのか、同志社出身のかたは、こんなに親切なのかと、しみじみ思ったのです。

耳が少しよくなったとき、「同志社へ転校しないか」と福井先生が言って下さったんですが、家の経済的な事情などもありまして、そのまま東濃中学を卒業したわけです。私はもともと理科系とくに工科が好きでして、将来はその方向に進もうと思っていたんですが、耳の関係で卒業まぎわに父や叔父が猛反対するものですからあきらめまして、福井先生のすすめもあって、それならということで同志社へはいりました。

当時の同志社は、赤煉瓦のりっぱな校舎が並んでいるし、創立記念のイブには、ロンバ

ード先生の指導で英文科の学生がシェークスピアのものの野外劇をチャペル前の校庭で演ぜられてねえ、なかなかいい雰囲気でしたよ。

原田助総長の辞任問題

——原田総長の辞任は大正八年一月ですが先生が学生のころですが、なにかご記憶に残っていることがございますか。

宗藤 いや、まだ学生でしたからねえ。流言飛語のようなことはいろいろ耳に入りましたが、私はりっぱなかただと思っておりまして、ひきつけられていました。財政上のことですごくいいかない、募金が集まらないといったことが問題になったように記憶しておりますがねえ。

——中学の波多野培根先生などと、宗教教育とか学生の風紀問題で意見が合わなかったということは……。

宗藤 そういうこともあったのでしょう。

——水崎基一先生とも意見が対立していたようですが。

宗藤 それは聞きましたねえ。水崎先生は募金などでずいぶん苦労なさったかたなん

ですが、「原田先生とはいっしょにやっていたくない」というようなことになって、大正七年に辞められましたねえ。私などが入学したころは、水崎先生は新島先生の伝記を講義しておられたんですよ。いま考えてみますと、デイヴィスさんが書いた伝記をもとにして講義されていたんでしょうが、ちょっと尖った声でね、非常に魅力があった。とにかく、私などはまだ入学して間もない学生だったので、どうして水崎先生その他の先生が辞められるのか、聞かされもしませんでしたしね、詳しいことは分らないままですよ。

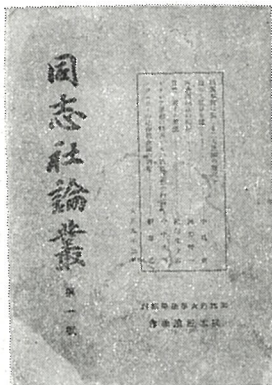
海老名弾正総長の就任

——大正八年一月には原田総長も辞められて……。

宗藤 理事や先生がたの中にも、お引き止めするかたはたくさんいたようですがねえ。それから一年ばかり空白になったんです。

——中村栄助さんが総長事務取扱で。

宗藤 そうそう。それでね、同志社は大学令による大学になった（大正九年四月）、いつまでも総長不在では困るじゃないかというのでいろいろ考えられた末、本郷教会の牧師を



『同志社論叢』創刊号

しておられて、歐洲から帰国されて間もない海老名先生をお迎えしてはどうか、という話がでるようになった。反対意見もかなり強かったようですがね。

そこで私たち大正十年卒業予定のクラスの学生が中心になりましてね、東京、京都における理事を、皆で手分けして個別訪問したのです。「海老名先生に来てもらって下さい」と頼みに行ったわけです。そして、次期総長を決めるという最終的な理事会が、大正九年一月に開かれた。当時の本部の建物は木造二階建て、京都看病婦学校（明治三十九年廃校）のときのもので、いまの弘風館の辺りにありましてね、東門を入った突きあたりで、通路は建物の手前で北に曲り、さらにいまの明徳

館前あたりをまっすぐに西門へ通じていました。カラタチの生けがきがあつて、傍らに溝があり、その近くに中島の本屋さんなどがあつり、東門を入った所は受付で、隣に和田の靴屋さんの店がありました。

その本部の建物の前へ、学生は机を持ち出しまして、山本唯三郎さん（旧図書館建築資金の寄付者が寄贈された新島先生の胸像を据えて、民潮会（政治科）など多くの学生が中心になつて、入れ替わり立ち替わり演説をやつたんですよ、涙を流しながらねえ、それは熱心なものでした。海老名先生を総長に決めないことには、理事はうかうか外へ出ることもできない、そういうふんい気でした。

——かん詰めですね。（笑）

宗藤 そうではないんですが、たいへんなものでしたよ。そして、チャペルでは祈禱の会をやつたんです、「祈りでもつてやらにやいかん」というわけですね。私たち一般の学生は両方へ行ったり来たりする、夜おそくまで帰る者はおりませんでした。そんなことで、理事会でも最後には満場一致で海老名先生に決めたわけですが、それを「同志社紛争」と言われたりするわけですけれども、い

わゆる紛争じゃない、ただもう学校を思う熱誠にあふれた演説と祈りだけの運動だったんですからね。当時の新聞『朝日』でしたか）社説にとりあげて褒めてくれましたよ、「同志社の運動こそ、真に学生の運動らしい堂々たるものだ」とね。

——どうしてそこまで学生は盛り上がったのでしょうか。

宗藤 まア、原田先生が惜しまれながら辞められた後である、財政的にも苦しい、こんな学校の総長になつてやつて下さるかたが果たしてあるかとね、みな心配していたんですよ。それが大きな原因だったでしょうね。

——海老名先生に対する反対の理由は？

宗藤 詳しいことは分かりませんが、先生は、同志社を離れられてから、長い期間直接的な関係がなかったでしょう。だから、当時はもう先生をほんとうに理解している人は、同志社にはほとんどいなかった。それと、急迫している財政問題を解決する力量があるかどうか、まア、誰がやられても難しい問題なんです、そういう懸念があつたのだと思ひますね。

海老名総長の人と功績

——どういふおかたでしたんですか。

宗藤 非常に教育に熱心な方でした。

それと、なんと言っても当時の日本では有数の雄弁家でしたよ。そりゃもう、説教などでもたいしたものでした。長いときは二時間ぐらい説教される、最初の一時間か一時間半ぐらいは学説的なことか歴史的なことを話され、終わりの三十分ぐらいで、ぐっつとまとめ上げていかれる、少し早口になって、熱

がこもりましてねえ。聞いていて胸にぐっとくるものがあるんですよ。私は説教の速記を頼まれたことがありますね、先生のそういうふんい気をいかにして生かすかと、清書しながらいぶん苦心しました。

そんなことから、先生に接する機会がだんだん多くなったわけですが、海老名先生と、それからさきほど申しました福井先生に出会わなかったら、私はクリスチャンにはなっていないかったです。

——先生は、学生時代に海老名先生から洗礼を受けたのでしたね。

宗藤 そうです、大正九年十二月五日でし

た。助手で残りましてからもね、結婚相手のことでいろいろご配慮いただいたり、何かと親身になって考えて下さいました。「大事な本を読むときは立って読むほうがいい、体が地面などに接する部分が少ないほど、頭の働きがよくなる」、というようなことも教えられました。先生は月曜から金曜までかけて説教の準備をされましたが、そういう体験などから、いろいろ教えて下さったわけですよ。

——海老名総長時代に、専任教員の数がぐっと増えますね。

宗藤 同志社は国立なみの大学になったわけですよ、だから、内容も国立なみに近づけたものになきゃならんというわけですね。海老名先生は牧界以外のかたからも尊敬されておりまして、東京大学の教授や学生にもよく知られていたんですね、本郷の教会へやってくる学生たちは新人会というのをつくってました。そんな関係で、中島重、今中次磨といった先生を招かれ、続いて優秀な若手を採用されまして、スタッフの充実にはいづいづいを入れたらんですよ。

私など、学生時代には学部では同志社卒業の専任の先生から教えられたことは、阿部賢

一先生を除いてほとんどなかった、京都大学から来ていただいている講師が中心というような状態でしたからね。

有終館の火災と海老名時代の終焉

——海老名先生は、昭和三年十一月有終館の失火で、その責任をとって辞任されたわけですが、宗藤先生も残念に思われたでしょう。

宗藤 海老名先生にすれば、私たちも同じ気持ちでしたが、いよいよこれからという時でしたからねえ、残念でしたよ。しかし、時代が時代でしょう、社会的な問題でもあり、まア、しょうがないということですね。ただ、海老名先生は当時、病気の静養で同志社にはおられなかった、留守中のできごとでしてね、役職上責任をとられたわけですが、内部の者の責任については、ひとことも言われなかった。「最高責任者は自分なのだから、辞めるのは総長一人でよい」というわけですね、そこが偉大なところですよ。

——火災というのは、どういう状態だったのですか。

宗藤 私は非番でしたから、下鴨の家へ帰

って寝ていまして、朝まで知らなかったのですが、御所で御大典の儀式がありましたので、教職員がキャンパスの警備を交替でやっておりまして、寒いときだったから有終館一階の踊り場に大きな火鉢^{びょう}を置いて、炭をたい

て暖をとるようにしていた、まわりにいすなど置きましてね。その火鉢の過熱で床が焦げてきて火災になったのです。当時の京都市の水道の水圧は低かったので、三階までは消防ポンプの水がとどかない、だからどうしようもなかったんですな、上へ登って水をかけたそうですが。

——有終館は、火災以前とだいぶん変わっていますか。

宗藤 内部はともかく、外観は、もと南側にあった入口が東に変わっている程度でほとんど同じです。一階の踊り場や二階へ上がる階段なども変わっていないように思いますねえ。私たちは入学した翌年、有終館の三階の教室で授業を受けたんですよ。

——いまは物置ですが……。

宗藤 物置になっていますか。(笑) 思い出の多い建物です。ま、海老名先生のご尽力で同志社は蘇^{よみがえ}ったんです。ほんとうに思い

がけないことで辞任され、同志社を去られることになりましたねえ。

大学発足当時の学部のあるい気

——先生は大正十年三月に卒業されて、四月に助手になられたわけですね。

宗藤 そうですが、助手で残ることに決まったのは、その前年の九月です。学部の学生のところ、同志社法学会というのがありまして、例会と年一回の大会がありました。大会では教授と学生各一名が研究報告をやる、二年生のとき私もやらされましたね、その後で

恒藤恭先生に御所へ散歩に誘われまして、「あの報告の原稿を見せてくれんか」と言われた。お見せしましたところ、後になって「同志社へ残って研究を続けてみないか」とすすめて下さったわけです。日本銀行へ就職がほぼ決まっていたので、迷ったのですね。

大正九年の一学期の終わりに、中島重先生から、教授会では君を残すことに内定したからぜひそうしてくれと、ほとんど毎日のようにすすめられ、けっきょく日銀をあきらめて残ることに決め、九月始めに形式だけの

ことだから助手採用願いを出してくれとのこととでその手続きをとり、九月にははっきり内定しました。その後、統計学専攻の永田伸也さんが大正十年一月十九日に死去されたので、私に統計学を専攻とするよう申し渡されました。全く突然に私の統計学研究者としての運命の道が決定づけられたのが、大正十年一月でありました。

——海老名先生が東大出の若手を呼んでこられたのは、先生が残られた年あたりですね。

宗藤 そうです。

——そのころの法学部の、研究設備とか条件といったものはあまりよくなかったんですよ。

宗藤 京大など国立に比べればね。しかし、同志社も国立なみの大学になったばかりでしょう、内容もそれに伴ったものにしなきゃいかんのだというわけで、皆張り切っていましたから、不足を不足とは感じませんでしたね。学外からもりっぱな講師をつぎぎ講演に招いたり、ふんい気が盛り上がっていました。

図書について申しますと、滝本誠一教授が

辞められた時（大正八年）、先生の蔵書を河原林義雄さんが買って研究室の図書室へ寄附して下さった、実によいものがありましてね、これが研究室図書の基礎になった第一号で、次に今中次磨先生が欧州へ行かれたとき、当時は日本の貨幣は値うちがあったものですから、原書が実に安く買えた。それで皆から希望図書をきいて同志社の金を持って行って、いい本をたくさん買って帰られたわけですよ。これが基礎となった第二号で、それ以後私たちも努力しましてね。

——法学会の機関誌『政治学経済学論叢』の創刊は、大正八年一月ですから、先生の学生時代ですね。

宗藤 そうです。私が助手になったころは『同志社論叢』（九年三月創刊）でした。雑誌は恒藤恭先生が尽力されて創^レめられたのです。京大の経済学部がすでにそういうものを出版してしまってます。学問というものは本を読むだけではだめだ、印刷物にして学会に発表しなければ進歩しないというわけですね。

当時は致遠館一階の奥の部屋が教授室でしたが、そこで毎月一回研究会をやりまして、教授も若手も報告をして質疑の討論をやるん

ですよ、若手は発表回数も多くてね。そのころは独創性が重んじられまして、人が納得するような独自のものを考え出さねばいけないということ、とにかく、研究熱が燃えてくるようなふんい気がありましたねえ、大いに刺激されたものです。

——先生が特に影響を受けられたかたは？

宗藤 恒藤恭先生ですね。私は経済哲学を主としてやることで大学へ残ったのですが、最初は新カント派、特に左右田喜一郎博士の哲学にひかれていましてね、論理派的でした。實在論的な立場の恒藤先生とは方向が違っておった。それで私が助手になってからも、先生が論文を書かれるとき、私に意見をぶつけ、私をたたき台にされたんですよ、夕食後に私の下宿へ来られましてね、よく深夜まで議論をしました。そうしている間に、私は経験を重視する方向へ徐々に転向して行つたわけです。それが統計学へとつながって行つたのです。

経験を重んじる考え方は、同志社の信仰的なあり方と違った面がありますが、人間が精いっぱい努力をしないで神に頼り、神に逃げるのはいけない、それではほんとうの学問に

はならない、信仰と学問は別のものだというのが、私の一貫した考え方です。ただ、経験というものには情が入ってくるから、そこが難しい。「智に働けば角が立つ、情に棹させば流される」という漱石の言葉を、私は戒めにしてるんです。情に流されちゃ学問はできませんからね。

——統計学には数学が必要でしょうが、同志社で習われたんですか。

宗藤 独学です。同志社大学には数学科目はなかった。助手になってから京大の理学部へ数理統計の講義をききに半年通いました。が、講義で使われているテキストは、すでに私が読んでいたものでした。ただ、理学部での数理統計の授業はどういうふうにするかを知る上では役に立ちました。そのころアインシュタイン博士が来日され、京大理学部を訪問された、そのとき撮った大きな写真を分けられました。岡崎の公会堂で講演されたのですが、さいわい私は博士に個人的に接する便宜をはかってもらいました。私が統計学を始めたのは、日本ではまだ草創期でして、適当な参考文献などない時代でしたからね、大いに啓発されました。

学位を授与されたころ

——海老名先生が同志社を去られた後、法学部はごたごたしたようですが、先生は昭和八年から学部長をなさっておられますけれども、当時のことで何か……。

宗藤 あの時代のことはねえ、まだ私の口からはちょっと言いにくいこともありましてね。ただ、私は上から言われたからやるというのではなくて、誰から言われようと、自分が納得したことしかやらないという方針を堅持したつもりです。

——先生は、昭和十二年八月に、京都帝国大学から経済学博士の学位を授与されたのですね。同志社出身の現職の教員では、先生が博士第一号だと、伝説のようにいまでも語り継がれておりますが。

宗藤 同志社には「学位規定」もでき（昭和三年）、学位の審査ができるようになっていたのです。だから、学位を取るなら同志社でと考えていました。ところが「自分の学校で取ったんじゃない」という先生もおられましたし、まだ態勢ができ上がっていないからというので、外部から学位請求論文を

提出されたかたがあっても受け付けなかった状態でしてね。私は、学位が欲しくて論文を書いたわけじゃありません、しかし、著書などを頂いてはいたが、まだ一面識もなかった京大のある方が恒藤先生を通してすめて下さったのがきっかけで、提出することになりました。

私の統計学の恩師は、京大から講師で来ておられた財部静治先生でした。先生が、「京大からいま学位をもらったら、君は同志社にいつらくなるかも知れんぞ」とね、内情を知っておられたものですから、そう言われました。私としては、学界から認められることは研究者として光栄なことですから、「もしそうならてもししかたがありません」と申し上げました。

——お幾つのおときですか。

宗藤 学位を受けたのが三十九歳でした。ところが案の定、「学位は出してくれるな」と、同志社の要職におられたある人（今は故人）が申し入れをされたのことを聞きまして、審査の独自性が貫かれたことを感謝しています。京大をパスすると、今度は文部省へ働きかけたかたがあったそうです。当時は

文部省が決定権を握っておりましたからね、私より先に提出されたかたで思想関係で後になわされたかたがありました、そういう時代でした。

さいわい学位はいただいたのですが、チャペル籠城事件だとかたいへんなときでもありましたしね、私も人にあまり言いもしませんでしたし、「祝ってやる」と言われましても辞退いたしましたね。私の教え子で、当時学生部にいた「馬酔木」の同人、水内教之助（俳号鬼灯）君がやって来ましてね、かつて元改庵をおとすれたときの作

「一尊と聞く冬竹の葉のさやき」と書いたりっぱな短冊をお祝いにくれました。先生のまわりは、いまだざわさわと音をたててそうぞうしいことですね、そういう意味の句だと言いましてねえ。私にとって大いなるなぐさめとなりました。

——博士第一号の誕生は、たいへんな問題だったわけですね。同志社百年史の忘れがたい一齣だと思います。どうも長時間ありがとうございました。

（この対談は、三時間半余におよびましたので、紙数の関係上、割愛、要約した部分が多いことをお断りしておきます）